

# 蕉芭彰頭

第101号 令和7年12月

ねぶかしろ  
葱白く

洗ひたてたる

さむさ哉

芭蕉



## 名品解説 野坡筆「いざゝらば」等二句画賛

いざゝらば雪見に

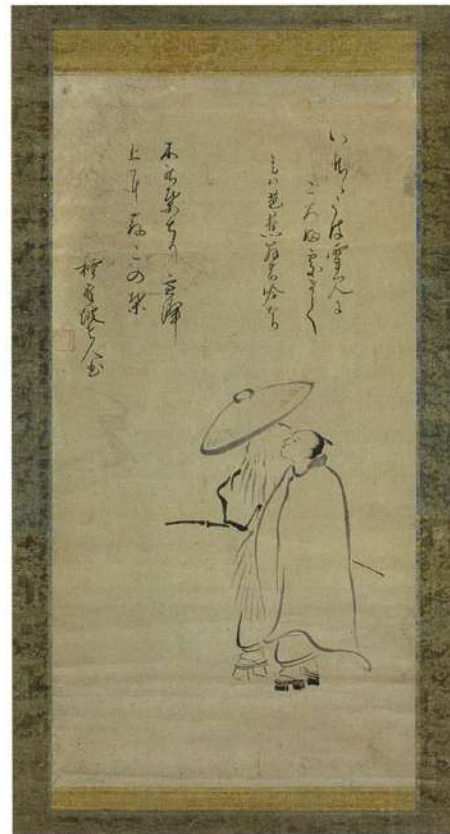
ころぶ処まで

是は芭蕉翁の吟なり

木の葉ちり雪降

上に散この葉

樗野坡老人書



野坡筆「いざゝらば」等二句画賛

蕉門俳人の野坡（一六六二～一七四〇）による画賛です。絵の中の二人は、奥の笠をかぶり杖を持つ人物は芭蕉を、手前の外套を着た人物は野坡自身を描いたものと思われます。賛として添えられた二句のうち、「いざゝらば」は、貞享四年（一六八七）、「笈の小文」の旅中で詠まれた芭蕉の句です。「さあ雪見に参りましょう。転ぶところまでどこまでも行こうではありませんか」という句意ですが、雪に浮き立つ子どものような気持ちと、「いざゝらば」という少しもつたいたいぶった表現とのギャップが面白い一句です。

もう一方の「木の葉ちり」は野坡の句です。正徳五年（一七一五）出版の『万句四之富士』に見える発句で、その頃の作と考えられます。また、宝暦九年（一七五九）出版の『野坡吟草』（宝暦九年）では、「ばせを庵にまかりて」という前書が添えられ、入集しています。これらによつて、この句は、芭蕉の没後に亡師を偲ぶべく訪れた芭蕉庵で詠まれた句であることがわかります。降り積もる雪のうえに、なおも降り注ぐ木の葉を詠むことで、尽きることのない深い悲しみを表現しています。

野坡は、越前国福井の生まれ。江戸日本橋の越後屋両替商に勤めるかたわら俳諧に親しみました。元禄末年（一七〇三）頃には職を辞し俳諧専一の生活を送るようになり、宝永元年（一七〇四）に難波に居を移してからは、西国俳壇の開拓と拡大に熱心に取り組み、中国・九州地方にまで蕉風俳諧を普及させました。

なお、本画賛は、令和八年一月九日から開催する芭蕉翁記念館企画展「俳聖」になった芭蕉」（令和八年三月八日まで）にてご覧いただけます。（伊賀市文化振興課学芸員 服部温子）

### 巻頭句解説

元禄4年（1691）に美濃国垂井で詠まれた句です。垂井は、根元の白い部分の多い「根深葱」の産地でした。洗いたてた葱の白さを見ると、折からの寒さが一層身に染みて感じられるという意味で、視覚と皮膚感覚を融合させた表現が見事な一句です。

顯彰芭蕉翁

第101号

編集・発行／公益財団法人

芭蕉翁顯彰会

〒518

0873

三重県伊賀市上野丸之内1-1-7の13

／電話0595・21・4081